

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	王 慧琴
主 論 文 題 名： 中国・遼東半島の地域社会の変容と観光文化の創出 —旅順周辺の事例を中心に—				
(内容の要旨)				
要旨				
1. 本論文の目的と意義				
<p>本論文は、中国遼東半島における漁村の「地域社会」の変化過程への考察を目的とする。筆者が漁村の「地域社会」に着目するのは、中国の漁村が農村の一部でありながらも、その地に根付いた文化や風習などは、農村社会と異なる特質を持っていると考えるからである。漁村社会の「独自性」は自然環境に影響されるが、その土地に育まれた「地域文化」が、地域のイメージ創りに大きな役割を果たしている。「地域文化」は、伝統的に所与のものとして存在するのではない。地域の人々が発見、創造し、育て上げたものが「地域文化」である[橋本 2011 : 155]と指摘されているように、「地域文化」は人々の発見と創造によって徐々に育まれるのであり、地域の「魅力」を演出すると同時に、地域の「独自性」の醸成に貢献することが期待されている。近年、中国で村おこしや町おこし運動が盛んになる中で、「地域文化」を掘り起こそうという風潮が高まっている。本論文では、中国沿海部の都市で最後に開放された旅順周辺の事例を取り上げて、新中国建国後に、「地域社会」の変化や地域経済の活性化をもたらした観光産業の推進に焦点をあてて、生業や社会伝承、及び伝統文化などの変容の考察を通して、中国北方地域、特に今まであまり注目されてこなかった北方漁村の「地域社会」の変容の全貌を浮き彫りにし、遼東半島における漁村地域の「独自性」創出の過程を考察したい。</p> <p>遼東半島南端にある旅順は19世紀から20世紀にかけて、かつてロシア、日本、中国が「近代」的勢力を張り合って、激しく拮抗した「震源地」として歴史的に有名である。特に日清戦争(1894～1895)と日露戦争(1904～1905)の戦場として世界中にその名を馳せた。また、その後に傀儡国家たる「満洲国」の建国により、旅順は約40年近く植民地の歴史が続いた。旅順をめぐる人々の記憶の中には、戦争と植民地の歴史が深く刻まれている。しかし、かつて戦場と植民地であった旅順が、現在どのように変わったのかについてはあまり知られておらず、旅順周辺の地域に関する研究報告も全く見当たらない状況である。そこで、本研究では旅順周辺の地域に焦点を当て、新中国建国後の経済の改革開放後に起こった、旅順およびその周辺地域における社会変動の動態を考察し、新たな研究成果を得ることを目的としている。</p> <p>旅順は三方を海に囲まれ、一方のみ内陸に接続した、昔から漁撈活動の盛んな地域である。旅順周辺には、漁村社会に特有な民俗風習が現在でも残されている。例えば、毎年旧暦の6月13日に龍王の祭りが、旧暦の1月13日に媽祖の祭りが行われる。また、旅順の周辺はナマコの産地として有名で、漁撈活動の一部に組み込まれており、ナマコは地域文化を象徴する食べ物である。漁撈にまつわる伝統文化は、旅順周辺地域のイメージ造りに有用だとして、地域の「個性」の創出にも重要な役割を担っている。しかし、これまでの中国の漁撈や漁村に関する研究は殆ど</p>				

南方地域に限られ、北方地域の漁村社会に関する研究は皆無の状況である。本研究は旅順周辺の漁村の生業や民間信仰など広義の伝統文化を詳細に考察することで、北方地域の漁村社会に関する研究の空白を埋めることを意図している。以上のような観点から、旅順周辺の漁村社会の実態を把握し、文化人類学の視点から社会的な変遷を考察する試みは意義があると考えられる。

また、改革開放後、旅順周辺地域の生業の変化は急速に進んだ。近年では、観光などサービス業が著しい発展を遂げた。そうした中で、旅順の観光産業はいかに推進されてきたか、特に観光推進の中で戦跡や遺跡などを巡るダーク・ツーリズムはいかに展開されているのかに注目したい。1978年以降、中国の改革開放は計画的に実施され、1980年に深圳や珠海、汕頭、アモイなどの開放が始まり、1984年には大連、天津、上海など14の沿海都市が開放された。旅順はその約30年後の2009年11月によく開放を迎えた。実は1996年に旅順の一部はすでに対外開放が実施され、観光推進もある程度の成果を収めていた。しかし、2009年の全面開放以後は、今まで禁止されていた地区にも入れるようになり、観光産業の更なる発展に寄与することになった。旅順の観光資源の中では、戦跡や遺跡が特徴的である。新中国建国後、かつての戦争に関わる戦跡と遺跡は、計画的に整備や修復の作業が進められて、「烈士陵园」や「万人坑」および「博物館」のかたちで、戦争や植民地時代の出来事を記念し、顕彰する施設として整えられた。これらの特定のメモリアルは、特定の社会集団が自らの集合性を確認し、より強固なものとしていくために、歴史上のある出来事を記念し記憶していく活動として、地域的アイデンティティの表象にもなっていると考えられる[坂部 2008:139]。一方、観光事業を推進する場合、戦跡や遺構などのネガティブな観光資源に偏ると、本来の観光の持つ魅力が半減し、楽しい体験が得られなくなる可能性がある。本研究は以上のようなネガティブな集成的メモリアルを、観光資源としていかに利用すべきかを検討して、地域社会との関連性を考察すると同時に、メモリアルの観光推進事業における位置づけを明らかにして、旅順における観光文化の創出の可能性を探りたいと考える。

2. 研究対象および研究手法について

本論文は、研究対象を旅順周辺の地域社会に設定している。筆者は主に旅順周辺の漁村を視野に入れ、長期的な調査を行ってきた。考察の対象は具体的には、漁村の生業、家族の変遷、地域の民俗風習、民間信仰など広範囲に亘っている。広範囲に調査を行うことで様々な資料が得られ、事象間相互の関連性を探り、より普遍的な知見を求めることが出来ると考える。また、地域社会は閉鎖的な「空間」ではなく、常に周辺地域と連動して変化している。特に90年代から中国では観光推進のために、毎年観光プロモーションが行われている。観光客を呼び込むために、観光客が移動しやすく連続性のある観光ルートを創出する工夫を凝らすことが要請され、大連、旅順、およびその周辺地域は、連携して観光商品の開発を推進することになった。以上のような状況を考慮して、本研究では、地域社会の動態を考察するために、遼東半島の漁村だけでなく、旅順、大連などの都市も考察の対象に組み込んだ。以上のような観点から地域全体の変容過程を解明していきたい。

本研究の研究手法としては、主に観光の政治・経済的側面と観光の社会・文化的側面の二つの側面から旅順周辺地域の観光推進の実態を考察する。政治・経済的側面を扱う場合は、観光が誰によって、いかに仕掛けられ、演出され、消費されるかを明らかにすることが重要である[山下 2007:4]。また、観光が如何に生み出され、国家主導の観光産業は如何に推進されたかについては、実践的な事例を通して観光を作り出す仕組みを究明する。さらに、観光を通じて、結果的に何が創出・生成されるのかを議論し、観光が作り出す文化を掘り起こす試みを行う。

3. 本論文の構成

本論文は主に漁村社会の変容を通して、観光文化がいかに創出されてきたのかを考察する。観光文化を作り出すためには、当然地域社会の積極的な取り組みが必要であるが、それ以外に行政

の効果的な政策や周辺の地縁関係の影響も大きいと考える。旅順周辺の漁村地域における観光推進の実態を解明するために、本論は序論、第一部「地域社会の変容」、第二部「外部からの働きかけ」、第三部「観光文化の創出」から構成されている。

第1章では、旅順周辺の概況について考察し、旅順の歴史と自然環境について概観した。

第2章では、旅順周辺における漁村の生業や家庭生活への観察を通して、漁村の生業や食生活及び住生活などの変化過程を論じた。特に労働形態の変化に伴う人々の労働意識の変化に注目した。人民公社時代は村の人々が全員人民公社の集団労働であったが、改革開放後、家族単位の漁撈が主流になってきた。収入が前より増える一方で、村の人々の交流が少なくなり、お互いに疎遠感が芽生え、地域のコミュニティには様々な問題が発生している。

第3章では、改革開放後の漁村地域での家族の変容を考察した。まず漁村社会の日常生活への観察を通して、地域社会の生活環境の変化を捉えた。漁村地域の女性の社会的な地位がいかに変わってきたかを究明すると同時に、従来の婚姻に関する価値観の変化も明らかにした。特に人民公社時代と改革開放後の結婚相手の選定基準を比較し、社会的な背景の特徴を読み取ることができるのではないかと考えた。漁村社会の事例を中心に、各時代の結婚式の考察を通して、時代の社会変化の足取りを垣間見ることができる。婚姻の変化は常に経済の発展状況に連動しているので、変化の要因を究明する作業を行った。本研究では主に婚姻変化に焦点を置いたが、今後、婚姻変化による家族の変容にも留意しなければならないと考えている。さらに漁撈活動が盛んになるに伴って、民間信仰や神様への祭祀や儀礼が益々重視されるようになってきた。そこで祭祀や儀礼などの行事を通じて、それが地域のコミュニティの再構築に有力な手段になる可能性についても論じた。

第4章では、旅順・大連の数多くの植民地遺構が負の文化遺産として定着し、「正」の観光資源とは異なる特徴を持っていることを考察した。本研究ではポストコロニアルの概念について説明した上で、その理解にあたっては歴史の「連続性」に注目する必要があると考えて考察を進めた。また植民地遺構と観光の「相互作用」の関係を明確にした[安村他編 2006: 64]。そして、植民地遺構のうち悲惨な記憶を呼び起こす戦跡をダーク・ツーリズムの重要な観光対象として取り入れる可能性を提示した。更に中国の政治主導期には、植民地遺構「烈士墓」、「万人坑」、「博物館」などが集合「記憶」に収められて、愛国主義教育の教材としての役割を果たしていたことを検討した。最後に旅順・大連の植民地遺構の特徴に着目し、地域社会によって果たす意義が異なることを指摘した。

第5章では、経済の改革開放を実施して以後の状況について論じた。特に1992年から中国政府は観光を大がかりに推進するために、毎年特定のテーマを定めて、大規模な観光プロモーションを行うことになった。これを契機に経済発展の恩恵を受けるのが遅かった旅順周辺の漁村地域にも、新しい観光形態の「郷村観光」(中国語では郷村旅遊)が導入された。「郷村」とは、田舎や村里の総称である。中国では「郷村観光」は「三農問題」、「三漁問題」の解決のみならず、地域社会の自然環境や暮らしなどを維持する手段としても注目されている。本研究では「郷村観光」の概念や特徴を考察し、「郷村観光」が外部社会にどのように影響されたのか、その社会的な背景も検討した。近年になって郷村観光に地域社会から熱い視線が注がれるようになった理由は、農村産業構造の調整期に伴う供給側の需要と、都市化の急成長による市場側の需要があるからだと考える。漁村地域では、郷村観光を通して外部社会との連携が強まり、地域の歴史や風土に培われた特色のある伝統文化を継承・発展させる土台が再構築されてきたともいえるであろう。

第6章では、農山漁村ツーリズムの構築にあたって、観光商品が如何にして生まれ、地域住民が観光商品の開発にどのように関わってきたのかについて、「在地の側」からの実践的な事例による研究を行った。従来、このような観点からの研究はあまり見当たらないという実態を踏まえ

て、観光がいかに生み出されるのか、観光が何を作り出したのかを検討した。本研究は先行研究の不備を補うと共に、漁村のツーリズムに焦点をあて、地域住民が観光資源に関してどのような意識変化を起こしたのかを考察し、漁村地域の観光振興の実態を考察する試みを行った。さらに2009年以後、旅順とその周辺地域の観光振興は大きく性格を変えており、古戦場見学などに偏っていた従来の集客姿勢の大きな改善への期待感が高まっている。観光が漁村社会にもたらした社会的、経済的効果は見逃してはならないが、旅順周辺地域の観光推進が、旅順のダーク・ツーリズムを補完する役割を演じることに注目が集まりつつある。

第7章では、漁村地域で漁民から最も重要視されている漁撈信仰や民間信仰など、独自の文化変容に関して考察した。宗教文化と観光の接点は、宗教ツーリズムと呼ばれるようになってきた。現在では観光資源にすることを目的として民間信仰の復興を企てることも多い。注目されるのはスミスのモデルである[Smith 1992:4]。このモデルでは、「聖」の宗教と「俗」のツーリズムの二つは対立する領域に現れ、「聖」と「俗」は一見矛盾しているように見える。しかし、実際には信仰と娯楽の両方の目的を持つツーリストが多数いるという観点から、宗教とツーリズムの共通点を掘り起こす必要があると主張する。そこで注目されるのは「真正性」authenticityである。宗教文化が持つ「真正性」は、ツーリストが求める「真正性」と合致している。本研究では、旅順周辺地域の漁民の日常生活に深く根付いた「媽祖」と「龍王」の信仰、民間信仰の中で最も影響力のある観音信仰を取り上げ、改革開放後、民間信仰がいかに復興され、表象されているのかを検討すると同時に、観光資源としてそれを持続的に利用する可能性の有無を論じた。民間信仰や伝統文化は観光商品の創出にとっても重要な意味をもつと考える。

第8章では、観光のもう一つの視点から「土産品」について考察した。特に地域の「特産品」を「土産品」として演出する過程を検討した。旅順周辺の特産品ナマコを事例として、遼東半島のナマコ食文化の歴史を踏まえて、現代のナマコ食文化の多様性、ブランド化されたナマコの位置づけなどを考察した。また、昔から培われたナマコ食文化を考察し、現代のナマコ食文化の特徴を解明した。現在ナマコは大連・旅順地域のブランド（銘柄）として確固たる地位を確立し、大連地域の文化指標となっていることは明らかである。ブランド化されたナマコの利用法は、主にもてなし、贈答品、儀礼の食べ物、観光客への特産品など多様性に富むので、今後、ナマコ食文化は観光振興の中で重要な役割を果たすことが期待される。

第9章では、まず観光開発における民間と行政との関わりについて論じた。経済改革開放後、中国政府は観光を「国策」として取り上げ、1992年から毎年観光テーマを定め、観光プロモーションを媒介として政府の観光政策を積極的に宣伝することを試みた。つまり中国の観光推進における政府の主導的な役割は、国の観光業の発展にとって欠かせない促進力である[邵2006:20]。地域観光の推進では、政府特に地域政府及び地元の人々が観光開発の担い手として重要な役割を果たしている。観光振興は確かに地域社会に様々な恩恵をもたらしたが、一方観光産業への展開を通して、地域政府が「績効」をアピールするよい機会でもあった。また、本章では観光推進による文化の変容と構築に関して論述した。観光と文化の関係を論じる際、勿論、観光推進により伝統文化を新たに発見し、再構築するといった視点からの分析が何よりも重要であるが、観光文化の創出は常に「ホストとゲストの間に存在する力関係の不均衡を土台にして成立している[太田1993:390]」ことから、「他者」であるゲスト側の視線からの考察も必要であることを論じた。

4. 結論と今後の課題

旅順周辺の漁村地域では、観光推進を通じて地域経済の活性化がもたらされた一方、地域文化の表象や地域住民自身のアイデンティティの構築においても重要な意義がもたらされた。特に観光推進の拡大により、地域社会で新たに創り出された「地域性」溢れる観光商品も数多くある。これらの「地域性」を持つ観光商品は、名所旧跡と同様に重要な観光資源として見なされているため、旅順の戦跡や遺構などのネガティブな観光資源への改善に寄与している。

本論では主に地元政府や地元民といったホスト側の視点からの考察を行っている。しかし、観光によってもたらされる効果を評価する場合には、ゲスト側からのまなざしが何よりも重要である。観光を消費するのはツーリストであるが、ツーリストの視線を通して、地域の観光資源や観光施設及びソフトサービス面に、様々な変化が引き起こされる可能性がある。従って、旅順の観光に関しては、今後ツーリストの多様な反応を詳細に検討するという課題が残されている。